

障害者に対する大学生の受容的態度に関する基礎研究 1

○ 北星学園大学 豊村和真 (000049)

キーワード：障害者、態度、大学生

1. 研究目的

障害者に対する態度を改善するためには、まずその正しい現状を知る必要がある。しかしながら従来調査による回答には二つの問題点がある。一つは、ただ障害者に対する態度のみを質問することである。それは障害者に対する質問で、特定の行動・動作—例えば公共機関内での静寂性を守らないこと—について尋ねた場合にあまり受容的ではないという回答であったとしても、それはただちに障害者に対する態度の特性とは言えないことになる。即ち健常者でも同様である可能性があるからである。

従って、障害者について問う（対障害者と略）質問は、健常者についても問う（対健常者）必要があると思われるが、従来ほとんどなされていなかった。

次に結果の安定性（信頼性）が不明なため、どの程度安定した結果（再現性が得られるのか）が判断できないことである。これは一般的な質問では、十分な回答数が得られればある程度は大丈夫であるが、態度については、先行研究により対象に関する知識の程度や接触経験などにより左右されるといわれ、必ずしも一度の大量な回答で充分であるとは言えない面がある。

これらの2点の問題点について配慮しつつ検討してきた（豊村,2015）他が、今回新たに多少項目内容を修正した結果が得られたので、それらについて報告する。

2. 研究の視点および方法

目的で示したように、同一の質問項目を対健常者と対障害者について質問し、それが障害者に対する態度であるのかどうか検討する。一定期間を空けて同一協力者に再度質問をすることで、結果の信頼性について検討する。今回は第一の視点について報告する。

協力者：1年男子13名女子40名、2年男子9名女子14名の76名であった。なお、一週後に同様の調査を実施したが、その人数は合計で28名であった。

手続き：大学の講義の時間を利用し、質問紙を配布、その場で回答させ回収した。

質問紙：①性別、学籍番号、学年、年齢の基本属性、②予備的調査で作成したリッカート尺度23項目から因子を考慮して選抜した7段階12項目×2（対障害者、対健常者）、③コンジョイント分析用尺度（全概念尺度）7段階11項目×2（同上）、④記入時に想起した障害（障害者について評定をしたときにイメージしていた障害を、精神障害、知的障害、身体障害、障害全般、その他の5項目から1つ選択）、⑥障害者との接触に関する内容（経

験、自発性、内容、今後の接触に関する意欲)であった。

リッカート尺度は先行研究で作成した23項目から、4因子(人当たり、人付き合い、社会適応力、見た目)12項目を取り出し、それらの因子の項目の合計値を因子得点とした。

今回はリッカート尺度の結果について報告する。

3. 倫理的配慮

調査実施の際に、参加は任意であること、得られた結果は研究の目的以外で使用されないこと、個人のデータが開示されることはないことを説明した。また質問項目には研究目的で使用して「良い/いけない」のチェック欄を用意した。「いけない」にチェックしたものはいなかった。

4. 研究結果

同じ地区で暮らしていく場合にどの程度受け入れられるかという趣旨の教示文について、1(不可)～7(可)と回答させたが、この値(値が大きいほど受容的)をそれぞれ、男女別因子別に平均値を求めたのが表1である。

表1 男女別対象別障害受容因子平均得点

	対健常者	対障害者	総計
女	3.64	4.03	3.83
1_人当たり	2.22	2.85	2.53
2_人付き合い	3.98	4.31	4.14
3_社会適応力	3.67	4.27	3.97
4_見た目	4.68	4.71	4.69
男	3.42	3.91	3.67
1_人当たり	2.08	2.58	2.33
2_人付き合い	3.41	4.11	3.76
3_社会適応力	3.56	4.36	3.96
4_見た目	4.64	4.61	4.62
総計	3.57	4.00	3.79

「見た目」因子項目(例:かっこわるい)は男女間にも、対健常、対障害においても変わらず、ほぼ一定の値を示し、もっとも受容的であった。

他の、「人当たり」「人付き合い」「社会的応力」因子項目についての傾向はほぼ同じで、受容度は、男性<女性であり、健常者<障害者という結果となった。

また、「人付き合い」、「社会的応力」因子は男女とも対障害者においては受容度が高いが、対健常者についてはやや受容度が低い傾向がみられた。最も受容度が低い因子項目は「人当たり」(項目例「和をみだす人」)であった。対健常者で男性回答者の場合がもっとも受容度が低かった。なおこれらの結果の信頼性については当日発表する。

5. 考察

全体として、男性よりも女性が、対健常者よりも対障害者のほうが受容的であるという豊村(2015)他の先行研究の結果が確認され、それら先行研究とは手法が若干変わっても、ほぼ安定した知見が得られた。

文献 豊村(2015), 大学生の障害者に対する意識3、第82回応用心理学会発表論文集